

Medi-Way 医療通訳者紹介 Vol.4 ポルトガル語担当 松下さん

◆なぜ医療通訳者になった？

医療通訳養成コースの受講者募集があることを偶然知り、応募、受講したことから現在に至ります。ポルトガル語での通訳訓練の機会はなかなかないため、「学べる」嬉しさから応募しました。必要な知識の多さと通訳訓練の緊張感に四苦八苦しました（未だにそうです）が、そうして時間をかけて覚えたことが世の中のどなたかの役に立つことにつながるのであれば、もっと学びたいという思いでこの仕事を始めました。

◆今まで医療通訳に携わってきて一番嬉しかったことは？

医療通訳は日常的に外国人とあまり関わりのない人々にとってはほとんど意識することのない職業ですが、感染症の治療、蔓延予防はもちろんのこと、地域の治安維持にまで関わり得る仕事だと考えています。そのため、患者と医療者の間にかかる橋のようになり双方のコミュニケーションがうまく運んだ時は、社会に関われたという充実感があります。

◆より良い通訳をするために心掛けていることは？

体調を整えることと、勉強し続けることです。体調がすぐれないと頭もうまく働かないことが多いため、体調管理の大切さを実感しています。精神科の診察や同行通訳では職場や社会で起こっていることに関する話題や質問も出てくることがあります。そのため、好奇心をもって世の中の出来事に関心を持ち続けることも大切だと考えています。



ちょっと一言 それって何て言うの？

「お大事になさってください。」

英語「Please take care of yourself.」

中国語「请多保重。」(クワンバオバウ)

ベトナム語「Xin hãy giữ gìn sức khỏe nhé.」
(シンハイグジュンズクホエーネー)

スペイン語「Cuídense.」(クイテンセ)

ポルトガル語「Cuide-se bem.」(クイヂェ スイベン)



今月のピックアップ

「言語によって異なる診療科の風景」

ベトナム語

最近依頼が引きも絶えず、留学生や技能実習生など若い方が多いです。また、結婚して子どもを持つのが当たり前という文化があるため、産婦人科の妊婦健診に次から次へと来る日もあります。

スペイン語・ポルトガル語

日本で長く働いている方が腰痛や肩の痛みで整形外科など来院されるケースがよくあります。また食文化の違いから糖尿病や高血圧、肥満での受診が多く見られます。

英語

患者さまの国籍も多種多様です。いわゆる「ネイティブ」ではなく、「第二言語」として英語を話されるアジアやアフリカ、中近東などの患者さまが多く訪れます。国や文化、個人によっても発音やイントネーションはまちまちのため、通訳者は集中して聞き取ります。

中国語

以前は日本の高度な医療を求めてセカンドオピニオンや人間ドックに来日される方がたくさん見られましたが、今は新型コロナの影響もあって少なくなっています。

新型コロナと言えば、どの言語もストレスを抱えて「心の相談」のために受診されるケースが増えているように思えます。通訳が入ることで少しでも患者さまがリラックスされ、診察がスムーズにいけばと願っています。

ひとつこぼれ話を

～甘い物好きは万国共通？～

南米はコーラやジュース、お茶にもお砂糖を入れる方も。中国もお酒が飲めない人は宴会でアツという間にコーラなどのボトルが空いていくとか。ベトナムはチェーやフルーツのジュース。診療科・患者さまの症状によっては「コーラとかたくさん飲んでませんよね？」と聞かれると“お見通しですね”と苦笑されるかもしれませんね。言語を超えた交流の画が思い浮かびます😊

